足立良作 **「痛みを負う人」**

＜前編＞

（効果音）　（目覚し時計の鳴る音）

一美の母親　（階下から）一美、一美！　早く起きなさい！　遅れるわよ！

（効果音）　（目覚し時計、鳴り続ける。）

母　（一美の部屋に入り）いい加減に目覚まし止めなさい！　全くもう。

沢村一美　うーん。もう、うるさいなあ。今起きるってば。

母　8時になるわよ。遅刻するでしょ、また。

一美　分かってるよ。ほっといてよ。

母　何言ってるの。ママ、この前みたいに学校に呼ばれるの、もうイヤですからね！ほら起きなさいってば。（一美の布団をはがす。）

一美　ちょっと、やめてよ、何すんのよ！

母　「何すんの」じゃないでしょ。全くもう。…あら、…一美、ちょっとあなた、それ何よ。おなかに何くっ付けてるの？　あなた、まさか…。

一美　やだ。見ないでよ。関係ないでしょ。

母　何言ってるの。関係なくないでしょ。見せなさい！

一美　うるさいなあ。何でもないって言ってるでしょ。ただのピアスだよ、ヘソピアス。もう出てってよ。着替えるんだから。

（効果音）　（バタンと戸が閉まる。）

一美モノローグ　またママに突っかかってしまった。ママが好きなのに、ちょっと何か言われると、かっとして突っ張ってしまう。このごろ特にひどくて、その度に自分がイヤになる。

＜タイトル＞

母ナレーション　思えばこの朝、わたしたち親子の長く苦しい闘いは、もう始まっていたのでした。でもわたしには、娘の一美の心と体の変化が、本当には分かっていなかったのです。一人娘の一美は、私立の女子中学に通う2年生ですが、幼いころから明るく、のんびりした性格で、何でも母親のわたしに話してくれました。学校でのこと、友達のこと、好きな男の子のこと…。ですから、娘のことは何でも知っているという自信もありました。夏休みを過ぎたころから、夜帰りが遅くなることが会っても、それほど心配することはなかったのです。

（効果音）　（夜の町の雑踏。ライブハウスの中で、吉川隆史らの奏でる激しい音楽。）

吉川隆史　（ステージから近寄り）よお一美、今晩も最後のステージまでいられるのか？

一美　あ、隆史、もちろんだよ。隆史のバンド聞くために来てるんだからね。

男子　隆史はいいなあ。一美と最後まで一緒なんだ。（隆史、ステージに戻る。）だけど一美のうちって、親が理解あるよな。

一美　まあね。ママも若いころ、コンサートとかライブとか行きたかったんだけど、おじいちゃんがすごく厳しくて行けなかったんだって。だから、割と自由にやらせてくれるほうかも。

男子　ふーん。いいなあ、話しの分かる親で。ところでさ、一美。お前、少しやせたんじゃねえか？

一美　えー。別に、それほどでもないよ。まだまだ足だって太いし、顔ももっとやせて小顔になりたい。

男子　えー、いいじゃん。もう十分スリムだよ、一美は。それに女の子はちょっとポッチャリしてるほうが、かわいいぞ。

一美　いいの、あんたの好みじゃなくって。だって隆史は細くてかわいい子が好きだって言ってくれたもん。

男子　はいはい分かってますよ。一美は隆史しか眼中にないんだから。

（効果音）　（玄関の戸が開く。）

一美　ただいま。

母　お帰り。ご飯は？

一美　ううん、要らない。おなかすいてない。

母　外で食べてないんでしょ？　何か一口でも食べたら？　体に悪いわよ。

一美　ううん、平気。寝る前に食べると太るから。じゃお休みなさい。

母ナレーション　そのころから、一美は急に食が細くなっていったのですが、思春期の女の子がだれでも通る、単なるダイエット願望だろうと思っていたのです。ところが次第に体重が減っていくに連れて、ますます食欲がなくなり、体調もかなり悪くなっていったようでした。

（学校。放課後の面談室）

教師　沢村さん。わざわざお呼び立ていたしまして。まあどうぞお掛けください。

母　はい。先生、いつもお世話になっております。あの、一美が何か？

教師　ええ、二、三、気になったことがありまして。最近、どうも体の調子が優れないということで、保健室で休まれることが多いんですよ。体育の時間に貧血を起こしたこともありまして。それで一度、ご家庭の方にお話を、と思ったわけです。

母　保健室に、そんなに度々…。

教師　はい。授業中にボーっとしているので、注意したら、「じゃ、保健室に言ってきます」と言って出ていくときもあると聞いています。どこかお悪いわけでは？

母　はい、特に病気というわけではございません。ただ…、ただこの数か月、食欲がひどく落ちてまして、まともに食事をしておりません。ダイエットだとか申しまして。本人が大丈夫だと言うものですから、つい気がつきませんで。

教師　一度、きちんと病院で見てもらったほうがよろしいんじゃないですかね。まあ、体調がそんな具合なので、当然学習のほうも滞ってまして、今回の定期テストの結果がこちらです。このままの成績だと、うちの高校へ上がるのは難しくなってくるかもしれません。それと…、これは生徒のうわさ話なので、念のため確認させていただきたいのですが、一美さんが深夜、繁華街を出歩いている、というようなことは…。

母　はい、、申し訳ございません。実は、何度かそのようなことが…。

教師　本校では、生徒の生活態度について、日ごろからきちんと指導しております。深夜の外出も、もちろん認めておりません。ご家庭のほうでも、そこのところをよくご指導くださるよう、よろしくお願いします。

母　はい、本当に申し訳ございませんでした。

母ナレーション　それから、わたしや嫌がる娘を半ば引きずるようにして、病院に連れていったのです。

医師　お嬢さんの場合、特に内臓の機能に障害はありません。

母　でも先生、ご版が食べられないんです。無理に食事をさせると全部戻してしまうんです。

医師　恐らく、心理的なものから来る摂食障害でしょう。まあ、思春期特有の軽いうつ病だと考えられます。

母　軽い、うつ病…？

医師　はい。今は、食物を拒絶する段階のようですが、精神的に更に不安定になると、積極的に自分の体を傷つけるような行為に走ることもあります。よく気をつけてあげてください。そちらの専門の科に連絡しておきますので、近いうちに、カウンセリングを受けさせてください。

母モノローグ　一美が、うつ病？　どうしてそんなことに…。

一美　ママ、何だって、先生？　わたし、どこも何ともないって言ってたでしょ？

母　一美…。そうね、体は特に悪いところはないって。食欲がないのは、精神的に…、多分ストレスがたまってるんだろうって。

一美　ほらね。大丈夫なんだから。ストレスかぁ。そっか、ストレスか。そう言えば、勉強とか、部活とか、いろいろプレッシャーが多かったかも。

母　無理しないで、イヤなことがあったら、ママに何でも話してよ。

一美　うん、分かった。そうする。

母ナレーション　それから、1か月ごとに、親子でカウンセリングに通う日々が始まりました。食欲も学校での様子も相変わらずのようでしたが、わたしも口うるさく注意するのを慎み、なるべく娘に気持ちの負担をかけないように、気遣っていたつもりでした。学校側の寛容な計らいで、何とか高校に上がることもでき、心機一転、解放へ向かうことを願っていた、そんな矢先――。

一美　（2階から大きな声で）ママー！　ママー！

母　（階段を上がりながら）何なの。用があるなら、自分で降りていらっしゃい。大きな声で。（効果音　ドアノブを回し部屋に入る。）一美、一美！　どうしたの？　何があったの!?

母ナレーション　部屋の中でわたしが見たのは、血で真っ赤に染まった手首を必死で押さえている娘の姿でした。

一美　ママ、切れちゃった。痛いよぉ、痛い…。

母　しっかりしなさい。こっちに見せて。そんなに深くはないみたい。ここ押さえてなさい。

母ナレーション　傷の手当てをして、包帯を巻いてやると、娘は少し安心したらしく、照れくさそうに話し出しました。

一美　ツメのね、付けヅメの割れたところを直そうと思って、カッターで削ろうとしたら、手が滑っちゃって。ああ怖かった。血がダーって出てきた時は、どうしようかと思っちゃった。よかった、ママがいてくれて。

母　ママのほうがびっくりしたわよ。心配させないでちょうだい。傷のところ、明日も消毒しとくのよ。

一美　はーい。ごめんね。

母ナレーション　その時、わたしは「自分でわざとやったんじゃないの?」という言葉を必死にのみ込んでいました。娘のケロッとした表情から、本当に事故だったのだと思い込もうとしたのです。けれども、いくら振り払おうとしても、「あの子は自殺しようとした…」という恐怖を取り除くことはできませんでした。思い余ったわたしは、娘が学校に出かけた後、部屋の中を調べてみました。何か少しでもあの子を理解するカギが見つかれば、というせっぱ詰まった思いからでした。そこでわたしは、娘の日記帳を見つけてしまったのです。

（効果音）　（日記のページをめくる音）

母モノローグ　一美、ごめんね、こんなことして。でもママ、心配でたまらないのよ。…これは？…まさか、そんな…。

＜後半＞

ナレーション　娘の一美は高校 1 年生です。心の病のため摂食障害となり、ついに自分の体を自らの手で傷つけるようになってしまった娘の心を知るため、わたしは娘の日記を開いてしまったのです。

（効果音）　（日記のページをめくる音）

母　「今日とうとう眠れないまま、朝を迎えてしまった。こんな生活、一体いつまで続くんだろう。苦しいよぉ。もう死にたい、死にたい、死にたい!!」
こんな…まさか、あの子がこんなことを…。

＜タイトル＞

母/一美　「こんな気持ち、だれも分かってくれない。だれにも。（オーバラップして一美の声に）「どうしてこんなに苦しいのに、生きてなくちゃいけないの?」って隆史に聞いたら、ヘンな顔されてしまった。「お前、おれに遺書なんか残すなよ」だって。マジ信じてない。ママは何でも話してって言うけど、そんなの絶対にムリ。カウンセリングに行って、少し元気になった振りすると喜ぶんだもん。「死にたい」なんて言ったら、泣いて大騒ぎするに決まってる。ママを悲しませたくない。先生だって、わたしのつらさなんて分かるはずない。自分だって、どうしてこんなふうになっちゃったか、分からないんだもん。先生はこんなことを言う。「世界には、生きたくても生きられない子供がたくさんいるんだぞ。」「戦争で命を絶たれた人の悔しさが分かるか?」　分かんないよ、そんなこと。わたしには分かんない。できることなら、本当に生きたい人と、命を取り替えてあげたい。でもそんなのムリだし。確実に分かっているのは、わたしは心が弱いってこと。顔も頭もダメだし、体も心も弱い子なんて、生きていてもしょうがない。わたしなんて、ダメな、ダメな、ダメな子なんだ。わたしの体なんて、なくなっちゃえばいい。でも、死んだらどうなるんだろう。どこへ行くんだろう。怖い。だけど今よりはきっと楽になれるんだよ。痛くもないし、吐いて吐いて苦しむこともない。でも、ママは悲しむだろうな。そんなのダメ。ママがかわいそうすぎる。

母　一美…。こんなこと考えてたなんて。ママ、全然知らなかった。あなたがこんなに苦しんでいたなんて。死んでしまいたいとまで思い詰めていたなんて。

（効果音）　（一美が帰宅する音）

一美　ただいま。今日のライブは最高だったよ。隆史のバンドがもうメチャクチャカッコいいの。根、今度ママも、一緒に行こうよ。隆史に紹介したいんだ。ああ、なんかおなかすいちゃった。フルーツとかあったら食べたいな。

母　……。

一美　どうしたの、ママ?　聞いてる?

母　え?　ああ、聞いてるわよ。えーと、グループフルーツでいい?

一美　うん、サンキュウ。それでね、今日のライブのラストの曲に、隆史がわたしのほうに帽子を投げてくれて。そしたら、隆史のファンの子たちが、すっごい怖い顔でにらんできてさぁ。（FO）

ナレーション　その晩の、不自然なほどの一美のはしゃぎぶりが気になったものの、昼間の一美の日記を読んだショックから、頭が混乱していたわたしは、それ以上娘の顔を見ているのもつらく、あの子が自分の部屋に引き上げていった時には、正直言ってホッとしたのです。なかなか寝つかれないまま、ようやくウトウトしかかった時でした。

（効果音）　（電話の呼び出し音。次のナレーションの背後でも鳴り続ける。）

ナレーション　初めは、真夜中の迷惑な間違い電話ぐらいに思って、ほうっていたのですが、その後 2 回、3 回と鳴り続くのです。

母　（受話器を取り）はい、どちら様でしょう。

隆史　（フィルター音）（緊迫した声）もしもし、夜分すみません。僕、吉川隆史といいます。一美の友達の。

母　あ、吉川さん。一美が紹介したいと言ってたお友達ね。どうかしたの?

隆史　（フィルター音）あのー、一美いますか?

母　ええ、部屋にいると思うけど、急用？

隆史　（フィルター音）すぐに部屋見てみてください。さっき、一美からヘンなメール来たんです。何だか、「もうお別れ」みたいな。「バイバイ」とか「今までありがとう」とか。びっくりして一美の携帯にかけたんだけど、出てくれないんです。

母　分かったわ。ちょっと待ってて。（慌てて一美の部屋に行く。）

母　一美、一美！　しっかりしなさい。（２、３回、一美のほほを打つが反応がない。）一美！　一美～！

（効果音）　（救急車のサイレン。病院に運ばれ、医師の処置を受ける。）

医師　今、処置が終わりました。

母　先生、娘は、娘は助かるんでしょうか？

医師　命に別状はありません。幸い発見が早かったのと、飲んだ薬の量もそれほど多くなかったので、胃を洗浄して、今は眠っておられます。

母　ありがとうございます。

医師　ただ、1つ気になることがありまして。

母　はい？

医師　お嬢さんが、今度のように自分の体を傷つけるような行為をしたのは、これが初めてではありませんね？

母　はい、実は以前にも手を切ったことがありまして…。

医師　カウンセリングは受けておられますか？

母　はい。もう2年ほど続けておりますが、なかなか思うようには…。今日のように、命にかかわるようなことは、今までになかったんですが。

医師　そうですか。とにかく今は、そばにいてあげてください。本人が目を覚ましてからが、むしろ心配ですから。

母　はい、分かりました。

（しばらくして、一美、目が覚める。）

一美　うーん（うなる）。

母　一美、気がついたの？　分かる？

一美　あ、ママ。……ここは？　病院？　あたし、どうして…。そっか、あの時…。

母　睡眠薬、あんなにたくさん飲んで…。本当に危ないところだったのよ。助かって

よかった。本当によかった（涙声に）。

一美　ママ、ごめんね。泣かないで。もうこんなことしないから。でもどうして分かったの、わたしが薬飲んじゃったこと？

母　吉川君が電話してくれたのよ。あなたからヘンねメールが来て心配だから、様子を見てくれって。

一美　隆史が…。そうだったんだ。わたし、あの時のことを思い出せない。隆史にメールしてたなんて…。やっぱり、本当は死にたくなかったのかな。助けてほしかったのかなぁ。でもね、ママ。ダメなの。あの声が聞こえると、わたし、苦しくなって…。

母　（けげんそうに）あの声？

一美　うん。「お前はダメだ。お前は醜い。生きていてはいけない」って、だれかがささやくの。その声を聞くと、わたし、もう自分でも、どうしていいか分からなくなっちゃって。これって、わたしの心が弱いからでしょ？　ごめんね、ママ、こんなバカな子で。

母　何言ってるの。ママこそ、あなたがそんなに苦しんでいたなんて気がつかなくて。今度そんなふうに苦しくなったら、ママに言いなさい。死ぬなら、ママも一緒に死んであげるから。一美だけを独りで逝(い)かせたりはしないから。

一美　ママ…。

母　一美…。さ、今は何も考えないで、もう少し眠りなさい。

（翌朝）

（効果音）　（ドアをノックする音）

医師　沢村さん。おはようございます。気分はいかがですか？

母　あ、おはようございます。明け方から、かなりぐっすり眠ったようです。

医師　そうですか。検温しましょう。

福田慎一　おはようございます。

医師　お母さん、ご紹介します。うちの病院のボランティアの福田さんです。

福田　よろしくお願いします。

医師　付き添いの方のご用とか、買い物とか、話し相手とか、いろいろ手伝ってくださるんですよ。

福田　何でも気軽におっしゃってくださいね。

母　はあ、よろしくお願いします。

ナレーション　その病院には、医療スタッフのほかに、患者やその家族をサポートしてくれるボランティアがいたのです。福田さんというその中年のボランティアの方は、温かい笑顔でわたしたち親子に接してくださいました。

福田　お母さんのほうが少し休まないと、倒れちゃいますよ。お嬢さんには、しばらくわたしがついてますから、ちょっと息抜きなさったら？　ここはキリスト教の病院だ

から、3階にチャペルもありますよ。あそこは心が落ち着きます。

母　チャペル、ですか？

福田　ええ。お母さん、悪いんだけど、実はゆうべ、聞こえちゃったんですよ。娘さんに「お母さんも一緒に死んであげるから」って言ってたでしょ。「ああ、これはお母さん自信も、かなり心が疲れちゃってるのかな」と思って。ごめんなさい、余計なこと言って。

母　いいえ、ありがとうございます。わたし、お言葉に甘えて、少し休ませていただきます。

ナレーション　福田さんの言ったとおり、3階のチャペルはこぢんまりとした中にも落ち着いた空間で、すでに2、3人の患者さんたちが、ベンチにかけている姿がありました。頭を垂れて祈っている方もいました。わたしも、できることなら祈りたい。本当に神がいるのなら、一美とわたしを今の苦しみから救ってほしい、そんな思いに駆られ、中に足を踏み入れてみると、扉のわきに掲げられた、ある言葉が目に留まったのです。

母モノローグ　「まことにキリストは、私たちの病を負い、私たちの痛みを担ってくださいました。」（聖書）…私たちの病を追い、私たちの痛みを…。わたしは母親でありながら、娘の苦しみも痛みも代わってやることができない。あの子が自分の体を傷つけても、何もしてやれない…。

ナレーション　そう思った時、わたしは、崩れるようにその場に座り込み、心の中で叫んでいました。「もし神がいるのなら、あの子の痛みを分かってやってください。そして、あの子の苦しみをいやしてやってください。」祈りとも言えないような心の叫びでした。けれどもその叫びの中で、固く閉ざしていた心の奥のしこりが、スーっと溶けていくような思いを感じていました。

あの子がこれからどうなっていくのか、見当もつきません。わたしたちの闘い、あの子の心のやみとの闘いは、これからも続くのでしょう。でも、そうしたら、心の重荷に耐え切れなくなったら、またここへ来て、涙ながらに心の叫びをぶつければ言い。そしたら、あのお方が、聞いて下さるかもしれない。わたしや一美の痛みを負ってくださるかもしれない。――それは、真っ暗な心の底にともった、かすかな光のようでした。

＜完＞